

# 自転車も共存しよう

## 総合的な欧州をヒント

### 「フェアな道路空間」でシンポ

第4回自転車まちづくりシンポジウムは8日、旧宇部銀行館（ヒストリア宇部）で約50人が参加してあり、自転車と車、人との共生やまちづくりについて考えた。うへ交通まちづくり市民会議主催。



講演する三国さん（旧宇部銀行館で）

環境に優しい交通と持続可能なまちづくりについて情報交換しようという「歩行者・自転車・車のフェアな道路空間の共存に向けて」のテーマで開いた。地元はもちろん福岡県北九州市から聴講に訪れた人もいた。

「地球の友・金沢」の三国成子さん（石川県金沢市）が「なぜ自転車のことを考えるのか？」自転車のまちづくり金沢の事例から」と題してこれまでの活動を紹介した。

三国さんはドイツに環境学習に出掛けた際、日本と比べて自転車や車、歩行者がハード、ソフト両面から道路空間をつまぐすみ分けているのに接し、金沢市でも取り組むようになったという。「日本では環境まちづくり、交通がそれぞれ独立して議論されがちだが、欧州ではそれらを総合的に考えている。環境のために

自転車道を整備している側面がある」と指摘した。最初に取り組んだのが最も自転車を利用する機会が多い高校生を対象にした、市街地の道路を自転車で走行する際に危険、安全、快適と感ずる道のアンケート調査。これを色分けして落とし込んだマップを作成した。

三国さんは「自動車で乗る機会が多い大人の視点でなく、交通弱者である子供たちの声を反映させたことで実効性のあるものに仕上がった。それを契機に関係団体が参加するネットワークが発足し、国や県が道路整備に乗り出してくれた。いろんな議論の場が、そのまま自転車について学ぶ教育の場にもなった」と振り返った。

「こうした取り組みの結果、金沢市の自転車関連の事故率が確実に低下し、行政も協働でまちづくりに参画するようになった地球の友・金沢に声を掛けようになった」という。「対行政において要望、お願いばかりというスタンスでは前には進まない。裏付けのあるデータとそれに基づき意見を集約したものを行政にぶつけると分かってくれる」と経験談を話した。

引き続き「フェアな道路空間とは？」のテーマで参加者が自由に討議した。（浅野）

自転車を生かしたまちづくり活動を繰り広げる「地球の友・金沢」の三国成子さん（石川県金沢市）